

ラジオドラマ

『走れ、高橋』

ナレーション

西暦二〇二五年、ここはかつての日本。宇宙より襲来したゾルゾンビンビン星人が、東京オリンピック開催後の新国立競技場を買収し、近隣の土地を買い占めていったことから悲劇は始まった。新国立競技場は増築に増築を重ね、いまや、本州の七十パーセントを占める。人々は凡人アスリートとして、日夜、ゾルゾンビンビン星人の主催する大運動会に駆り出されていた。

ゾルゾンA

「立てーっ！ まだゴールじゃないぞ！」

地球人A

「もう走れません。五万キロマラソンなんて、地球を一周しても終わらない競技、誰も完走できませんよ」

ゾルゾンA

「うるせーっ！ これだから地球人はよお。すぐ弱音を吐きやがる。おれたちゾルゾンビンビン星人はな、成人式で五万キロ走るんだよ。走れなかったら大人になれねえんだよ」

地球人A

「おれはもう大人だ」

ゾルゾンA

「お前たち地球人の大人の基準は全く理解ができない。おれが今、普通にお前と喋れているのはおれが日本語を勉強したからなんだぞ！ お前ら、宇宙人と見るや光とか電気信号とかでコミュニケーションしようとしやがって。おれたちの言葉を分かってすらしなかったじゃないか。そのなになが大人だっ！」

ナレーション

ゾルゾンビンビン星人は、倒れた男を引きずり、医務室へ連れて行つた。そこには五万キロマラソンや、ロケット幅跳び、ネバーエンディングリレー、砲丸投げられ、投げやり槍投げ、火の玉玉入れなどの競

技で倒れた者たちが運び込まれていた。

ゾルゾン閣下 「地球人は弱いとう」

ゾルゾンB 「閣下、やはりこの星はだめです」

ゾルゾン閣下 「根性なしばかりだ。この星もやはりだめか」

実況 「おーっと、ここで123番の選手が4万8千キロを突破っ！ ここま

で4年、なんと4年も走って、いや、もう歩いているだけだが、それでも止まらないっ！」

ゾルゾン閣下 「何だと、地球人のくせに4万8千キロだどっ！ やつは誰だっ！」

ゾルゾンB 「えーっと、123番は・・・高橋、高橋洋平ですっ！ やつは4年前にスタートした第1組でただ一人、まだ、5万キロマラソンを続けています」

### 3秒ほど間をあける

高橋 「ちくしょう、あと2千キロもあんのかよ。はあ、はあ、あと何年かか  
るんだ。ちくしょう、大運動会なんてふざけたもん始めやがって」

実況 「123番、止まらない！ あと2千キロ！ 止まらない！ 彼はなぜ  
走り続けるのでしょうか！」

モノローグ おれが走る理由を知るやつなんかいるものか。おれは芸人だ。5万キロ  
マラソン、これは壮大な無茶ぶりだ。できないだろって誰もが思ってる。  
なんだ、あの、ジョリジョリちんこビンビン星人とかふざけた野郎ども  
は。テレビ出たがり系無茶ぶりプロデューサーみたいなもんだろ。

おれは、負けねえ。

ナレーション

洋平は激怒していた。必ず、かの邪知暴虐じゃちぼうぎやくのプロデューサーを除かねばならぬと決意していた。洋平は芸人である。コントをし、漫才をし、先輩の金で飲み食いしてきた。けれども無茶ぶりに対しては人一倍に敏感であった。

幸い、マラソンは競技場の外周をめぐるコースで行われた。全国津々浦々つつうらうら、海岸線をたどり、大運動会出場から逃げ延びた仲間の芸人や先輩芸人を頼っては飯を食い、宿を借り、たまに自転車でズルをし、なんとかやって来た。

高橋

「はあ、はあ。このマラソンが終わったら、おれはきつとスターだ。有名な歌手に作ってもらった歌でレコード大賞に出て、紅白にも出るんだ。ミリオンヒットだ。はあ、はあ。そしてすぐに忘れ去られるだろう。そしてできないかもしれないVシネの帝王の物まねしたり、人にあだ名を付けて再ブレイクだ！ 勝利の法則は見えた！」

ナレーション

そして2年後・・・

実況

「今、全国民、全宇宙人が見守る中、この新国立競技場、第1ゲートに、123番、いや、高橋洋平選手が、今、入ってまいりました！ 誰がこの光景を想像したでしょう、どれだけの人が待ち望んだでしょう、われわれ日本人のたった一つの希望、高橋洋平が、コートを回ります。手を上げています、力がもう残っていないのかワンちゃんのお手のようです、しかも両手なのでゾンビ、まるでゾンビです、ゾンビ高橋、ぼろぼろの洋服、ぼさぼさの髪、そしてなぜか甘いスマイル、割れんばかりの拍手と声援、6年の歳月をかけ、今、今、高橋ゾンビ洋平、ゴーーーーーリンーーーーーッ！！！！」

高橋 「へへっ、これで、無茶ぶりに答えてやったぜ。おれは……スター……だ……」

### 5秒ほど間をあける

ゾルゾンC 「閣下、高橋が目を覚ましました」

高橋 「こ、ここは？」

ゾルゾン閣下 「5万キロマラソンの完走、そして優勝おめでとう。ここはゾルゾンビンビン星人の宇宙戦艦、スペースバトルシップ山下の中だ」

高橋 「え、山下？」

ゾルゾン閣下 「優勝の褒美に、君に最高の舞台を用意してあげようと思っただけ。どうだね、芸人として宇宙デビューしてみないかね？」

高橋 「宇宙デビューだと？」

ゾルゾン閣下 「もう既にレギュラー番組も用意してある」

高橋 「レギュラー番組？」

ゾルゾン閣下 「最近、我が星ではぶらり散歩系と動物とのふれあい系の番組が流行っていてね。その2つを合わせたスペシャルな番組をぜひ君にやってほしいんだ」

高橋 「願ってもないチャンスだぜ。よし、分かった！ やってやるぜ！」

ゾルゾン閣下 「初回は電撃マグマ並木道で大怪獣と触れ合ってもらおうぞ。まずはゾルゾンビンビン語を勉強せよ」

高橋 「無理に決まってるだろーーーー」

ナレーション その後、高橋の姿を見た地球人はいない。ただし、宇宙では、そこそこ人気が出たとか、出ないとか・・・。

終